

資源管理指針の概要
(魚種別の資源及び漁獲の状況、資源管理目標)

魚種名	資源及び漁獲の状況	資源管理目標
1. さんま	<p>資源水準は、過去の CPUE (1操業あたりの漁獲量) の比較において、昨年の高位から中位になった。最近5年間では、2009年 CPUE は最低であり、また、資源量は減少傾向にあることから、動向は減少。</p> <p>2009年の日本の漁獲量は、31万トンであり、2年連続して31万トンを超えた。なお、我が国における当該資源の漁獲については、北太平洋さんま漁業が大半を占めている。</p>	<p>現状の漁獲圧は資源に対してかなり低いと言えるが、資源の水準・動向を踏まえ、適切な資源管理を通じて、今後も現状の資源状況を維持するよう努める。</p>
2. すけとうだら	<p>太平洋系群、日本海北部系群、オホーツク海南部及び根室海峡の4つの評価単位に分かれている。</p> <p>【太平洋系群】 2005年級群が卓越年級群となり良い加入となったものの、その後続く加入が見られておらず、資源水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【日本海北部系群】 2006年級群の良い加入があったため、2010漁期年の資源量は10万トンまで回復したが、資源水準は依然として低位であり、動向は横ばい。</p> <p>【オホーツク海南部】 資源水準は低位で動向は増加と判断される。</p> <p>【根室海峡】 資源水準は低位、動向は横ばい。</p>	<p>【太平洋系群及び日本海北部系群】 近年、海洋環境等が資源の増大に好適な状態にあるとは認められない。資源水準の低下が顕著となっている日本海北部系群については、資源の減少に歯止めをかけることを目指して管理を行うものとする。太平洋系群については、資源の回復を基本方向としつつも、回復のための措置が関係漁業者の経営に大きな影響をあたえる場合には資源水準を維持する等回復のスピードに十分配慮して、管理を行う。</p> <p>【オホーツク海南部及び根室海峡】 ロシア連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量</p>

	<p>なお、我が国では、主に沖合底びき網漁業及び刺網漁業により当該資源を漁獲しており、2009漁期年の漁獲量は22万トンである。</p>	<p>の年変動にも配慮しながら、管理を行う。</p>
<p>3. まあじ</p>	<p>太平洋系群と対馬暖流系群とに大別されるが、両系群は一部水域において混在して分布している。</p> <p>2010年資源量は、太平洋系群で8万トン、対馬暖流系群で49万トン。水準はいずれも中位、動向はそれぞれ減少、横ばい。当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。</p> <p>なお、我が国では、主にまき網漁業（大中型、中型、小型）及び定置漁業により当該資源を漁獲しており、2009年の漁獲量は16万トンである。</p>	<p>【太平洋系群】 資源水準の維持を基本方向として、管理を行う。</p> <p>【対馬暖流系群】 大韓民国及び中華人民共和国等と我が国の水域にまたがって分布し、大韓民国等においても採捕が行われていることから、関係国との協調した管理に向けて取り組む。 資源の維持又は増大することを基本に、我が国水域への来遊漁の年変動も配慮しながら、引き続き資源回復計画に基づく措置にも取り組むことにより、管理を行う。</p>
<p>4. まいわし</p>	<p>太平洋系群、対馬暖流系群に大別される。当該資源は、これまで数十年単位で大きく変動してきており、その資源状況によって分布域が大きく変化することが知られている。両系群とも1988年から1989年を境として漁獲量が大幅に減少し、近年は低い水準で推移している。</p> <p>資源水準は両系群とも低位であるが、資源量が増加していることから動向は増加。しかし、親魚量はかなり低い水準にあり、また当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。</p> <p>なお、我が国では、主にまき網漁業（大中型、中型、小型）及び定置漁業により当該資源を漁獲しており、2009年の漁獲量は5.5万トンである。</p>	<p>【太平洋系群】 資源水準の維持を基本方向として管理を行う。</p> <p>【対馬暖流系群】 大韓民国等と我が国の水域にまたがって分布し、大韓民国等においても採捕が行われていることから、関係国との協調した管理に向けて取り組む。 資源の維持又は増大することを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、引き続き資源回復計画に基づく措置にも取り組むことにより、管理を行う。</p>

5. さば類(まさば及びごまさば)

「まさば」は、太平洋系群、対馬暖流系群に大別され、「ごまさば」は、太平洋系群、東シナ海系群に大別される。それぞれ両系群は一部水域において混在して分布している。

○まさば

【太平洋系群】

資源水準は低位ながら2004年、2007年、2009年と豊度の高い加入があり、動向としては横ばい。

【対馬暖流系群】

資源水準は昨年低位から中位となり、動向は過去5年間(2005～2009年)の資源量が増加傾向にあることから、増加。

○ごまさば

【太平洋系群】

資源水準は高位にあるが、資源量が減少していることから、動向は減少。

【東シナ海系群】

資源水準は中位であり、近年の資源量・親魚量がともに減少傾向にあるので、動向は減少。

なお、我が国では、主にまき網漁業(大中型、中型、小型)及び定置漁業により当該資源を漁獲しており、2009漁期年の漁獲量は、まさばが27万トン、ごまさばが22万トンである。

○まさば

【太平洋系群】

安定的な再生産(新規加入)の維持に必要な産卵親魚量45万トン以上の確保が必要とされているが、現在の資源水準及び漁業経営に及ぼす影響等も考慮した場合に、短期間で達成することは困難である。このため、複数回の卓越年級群の発生を利用した段階的な資源回復を図っていくことが適当である。

引き続き資源回復計画に基づく措置にも取り組むことにより、優先的に資源の回復を図るよう、管理を行う。

○ごまさば

【太平洋系群】

資源を中位水準以上に維持することを基本方向として、管理を行う。

○まさば及びごまさば

【その他の系群】

大韓民国及び中華人民共和国等と我が国の水域にまたがって分布し、外国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみでの管理では限界があることから、関係国との協調した管理に向けて取り組む。

当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、また、まさばについては、引き続き資源回復計画に基づく措置にも取り組むことにより、管理を行う。

<p>6. するめいか</p>	<p>冬季発生系群、秋季発生系群に大別される。</p> <p>【冬季発生系群】 資源量は、2009年で118万トン、2010年で69万トン。資源水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【秋季発生系群】 近年中位～高位水準であり、2010年は119万トンとなり、水準は高位、動向は横ばい。</p> <p>なお、我が国では、主にいか釣り漁業、定置漁業及び沖合底びき網漁業により当該資源を漁獲しており、その他大中型まき網漁業等によっても漁獲が行われている。2009年の漁獲量は22万トンである。</p>	<p>するめいか資源は海洋環境の変化により大幅減少に転じる可能性があることから、資源動向の把握に努めつつ、海洋環境条件に応じた資源水準の維持を基本方向として管理を行う。</p>
<p>7. ずわいがに</p>	<p>オホーツク海系群、太平洋北部系群、日本海系群及び北海道西部系群に分けられる。</p> <p>【日本海系群】 富山県以西（A海域）では1990年代後半から資源は回復傾向にあり、2000年代に複数の豊度が高い年級群が加入したことにより、以前は低位であった資源水準が中位に回復。資源動向は横ばい。 新潟県以北（B海域）では、資源水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【オホーツク海系群】 資源水準は低位、動向は増加。</p> <p>【太平洋北部系群】 資源水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【北海道西部系群】 資源水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>なお、我が国における当該資源の漁獲については、沖合底びき網漁業が大半を占めており、その他かご漁業であるずわいがに漁業によっても漁獲が行われている。2009漁期年の漁獲量は4,600トンである。</p>	<p>【日本海系群、太平洋北部系群及び北海道西部系群】 資源の維持又は増大を基本方向として、安定的な漁獲量を継続できるよう、管理を行う。 特に、日本海系群については、その主たる生息域に日韓北部暫定水域が含まれており、同水域で韓国漁船によっても採捕が行われていることから、同国と協調した管理に向けて取り組む。</p> <p>【オホーツク海系群】 ロシア連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみでの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行う。</p>

<p>8. ベにずわいがに</p>	<p>資源水準は低い水準にあるが、2002年以降資源量指標値は増加傾向にあり、動向は増加。</p> <p>なお、我が国では、主にかご漁業である日本海ベにずわいがに漁業及びベにずわいがにかご漁業により当該資源を漁獲しており、2009年の漁獲量は1.6万トンである。</p>	<p>ベにずわいがに資源については、その主たる生息域に日韓北部暫定水域が含まれており、同水域で韓国漁船によっても採捕が行われていることから、同国との協調した管理に向けて取り組む。</p> <p>資源の回復を基本方向として、引き続き資源回復計画に基づく措置にも取り組むことにより、管理を行う。</p>
<p>9. くらまぐろ</p>	<p>太平洋くらまぐろの資源状況は、1952年～2005年と比較して中間的な水準であると推定されているが、未成魚の漁獲圧の増加により、近年、親魚量が減少傾向となっている。卓越年級群が繰り返し発生することにより、近年比較的良い加入が続いているが、現状以上に漁獲圧が増加した場合、将来資源水準の悪化を引き起こす可能性がある。</p> <p>現在の資源水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>くらまぐろは、近年、国際社会において資源管理に高い関心が集まっているが、特に太平洋くらまぐろは、全漁獲量の7割強が我が国によるものであり、また我が国周辺水域内に産卵場があること等から、我が国はその持続的利用に大きな責任を有する立場にある。</p> <p>なお、我が国では、主に大中型まき網漁業、曳き縄漁業及び定置漁業により太平洋くらまぐろを漁獲しており、2009年の漁獲量は1.3万トンである。</p>	<p>未成魚の漁獲を抑制・削減することにより、親魚資源量が中長期的に適切な変動の範囲内に維持され、過去の最低水準を下回ることのないように管理する。</p>
<p>10. めばち</p>	<p>【東部太平洋】 全米熱帯マグロ類委員会（IATTC）において、過剰漁獲の状況にはないと評価されている。資源の水準は低位、動向は横ばい。</p> <p>【中西部太平洋】 中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）において、近年の漁獲は過剰な状態にあると評価されている。資源の水準は中位、動向は減少。</p> <p>【インド洋】 インド洋まぐろ類委員会（IOTC）において、資源</p>	<p>いずれの海域においても資源の維持・回復を図るためには、漁獲圧をこれ以上に増やさないようにするか減少させる必要があるとされており、我が国としてもこの方針に則った形で管理していくこととする。</p>

	<p>及び漁獲は適正なレベルにあると評価されている。資源の水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【大西洋】 大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）の評価において、過剰な漁獲の状況は脱したと見られている。資源の水準は低位、動向は横ばい。</p> <p>なお、我が国では、主に遠洋まぐろはえ縄漁業及び近海まぐろはえ縄漁業により当該資源を漁獲しており、2009年の漁獲量は6.4万トンである。</p>	
11. きはだ	<p>【東部太平洋】 IATTCにおいて、漁獲は過剰ではないと評価されている。資源の水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【中西部太平洋】 WCPFCにおいて、漁獲は過剰ではないと評価されている。資源の水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【インド洋】 IOTCにおいて、大量漁獲時（2003～2006年レベル）からは減少したが、依然過剰な漁獲状況にあり、資源は乱獲初期の状況にあると評価されている。資源の水準は中位、動向は減少。</p> <p>【大西洋】 ICCATにおいて、資源は比較的健全な状態にあり、漁獲圧も適正であると見られている。資源の水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>なお、我が国では、主に海外まき網漁業、遠洋まぐろはえ縄漁業及び近海まぐろはえ縄漁業により当該資源を漁獲しており、2009年の漁獲量は6.8万トンである。</p>	<p>いずれの海域においても資源の維持を図るためには、漁獲圧をこれ以上に増やさないようにする必要があるとされており、我が国としてもこの方針に則った形で管理していくこととする。</p>

<p>12. かつお</p>	<p>【中西部太平洋】 WCPFCにおいて、漁獲は過剰ではないと評価されているものの、近年漁獲による死亡の割合が増加傾向にあることが指摘されている。資源の水準は高位、動向は減少。</p> <p>なお、我が国では、主に大中型まき網漁業、海外まき網漁業、遠洋かつお一本釣り漁業及び近海かつお一本釣り漁業により当該資源を漁獲しており、2009年の漁獲量は26万トンである。</p>	<p>WCPFCを通じた適切な資源管理措置の導入・実施に向けた働きかけを継続するとともに、漁獲圧を増やさないように管理していくこととする。</p>
<p>13. めかじき</p>	<p>【北太平洋】 WCPFCにおいて、資源の状況は健全であり、また、過剰漁獲の状況にはないと評価されている。資源の水準は高位、動向は安定。</p> <p>【インド洋】 IOTCにおいて、資源は乱獲状態になく、漁獲は過剰でないと評価されている。資源の水準は中位、動向は横ばい。</p> <p>【北大西洋】 ICCATにおいて、資源は乱獲状態になく、漁獲は過剰でないと評価されている。資源の水準は中位、動向は増加。</p> <p>【南大西洋】 ICCATの評価において、資源は乱獲状態になく、漁獲は過剰でない可能性が高いとされている。資源の水準は中位、動向は増加。</p> <p>なお、我が国では、主に遠洋まぐろはえ縄漁業及び近海まぐろはえ縄漁業により当該資源を漁獲しており、2009年の漁獲量は1.2万トンである。</p>	<p>地域漁業管理機関を通じた適切な資源管理措置の導入・実施に向けた働きかけを継続するとともに、我が国としてもこれ以上資源に影響を及ぼすことのないよう漁獲圧をこれ以上増やさないように管理していくこととする。</p>